

# パロディとアイロニー

—相違と類似の観点から\*—

岡田 聡 宏

## はじめに

(1) A composition in prose or verse in which the characteristic turns of thought and phrase in an author or class of authors are imitated in such a way as to make them appear ridiculous, especially by applying them to ludicrously inappropriate subjects; an imitation of a work more or less closely modelled on the original, but so turned as to produce a ridiculous effect. (Oxford English Dictionary)

この Oxford English Dictionary の定義にもあるように、作品の文体や思想上の特徴を模し、内容を変えて滑稽化や諷刺化したものを一般にパロディと呼ぶ。ただし滑稽化等の特徴をパロディに不可欠な要素とするかについては議論の分かれるところである。滑稽な効果を重要視する Rose の立場に対して、Hutcheon は次のように述べている。

(2) Her [Rose's] insistence on the presence of comic effect (without it, any definition, she feels, would not serve “a useful, distinct purpose” as a critical term) is also restrictive. Hutcheon (2000: 20)

様々な性質を包含する可能性を秘めるパロディの多様性と柔軟性を考慮に入れると、限定的な定義では、その限定性が部分的なものであれ、いかなるもので

もパロディの真の特徴を捉えることができなくなってしまう。限定性を排除しパロディの純粋な特徴のみを抽出して考えると、文学作品や発話等を明示的な形ではなく、暗示的に引用する暗示引用 'allusion' の一種であり、対象を新しい異なるコンテキストにおいて意図的に再現したものであるとパロディを定義することができる。パロディの対象を新しいコンテキストにおいて(差異を際立たせるために、しばしば命題内容を変更して)再現することにより、パロディの対象とパロディとの間に、何らかの不一致もしくはズレが生ずる。'The creation of comic incongruity or discrepancy will be taken as a significant distinguishing factor in parody' と述べているように、Rose (1993:31) もこの不一致をパロディの重要な識別要素と考えている。<sup>1</sup> この不一致に加え、対象を新しいコンテキストにおいて再現しようとする意図を持っていることを伝達することもパロディの重要な要素であるということを強調したい。この意図を認識することにより、読者(聞き手)は、パロディだけでなくパロディの対象をもコンテキストに加えることが要求される。

以上、パロディの特徴を簡単に述べたが、次にアイロニーについて触れると、Wilson and Sperber (1992) が(以下論文言及以外は Sperber and Wilson とする)定義するように、他に帰属する思考を拒絶的態度を示しつつエコーすることがアイロニーの特徴であると言える。

(3) The speaker echoes a thought she attributes to someone else, while dissociating herself from it with anything from mild ridicule to savage scorn.  
Wilson and Sperber (1992: 65)

エコーという概念には、他者の思考についてその内容を示すことのみならず、その思考に対する態度や反応を同時に表明するという特徴が含まれる。他者の思考を発話によって表すという特徴のみに焦点を当てて考えてみると、必ずしも暗示的であるとは限らないが、ほとんどのアイロニーが他者の思考を暗示的に表す、つまり引用するという特徴を持っており、この点において暗示的引用と特徴を共有していると言える。このアイロニーとパロディとに共通する特徴

を両者の類似点として挙げるができる。換言すると、パロディの対象をパロディの中に再現するという特徴と、文学テキストに加え、発話や思想などが対象になりうるという特徴が、アイロニーとパロディを近づけ、アイロニーがパロディ内に混在する可能性を生じさせているのである。

本稿では、パロディ及びアイロニーを伝達の一形態とみなし、文学テキストに限定せず発話をも含め、関連性理論の枠組みから分析を試みたいと考えている。また類似点と相違点を明らかにすることによって、アイロニーとパロディが密接に結びつく原因についても考察を試みたい。具体的な分析に入る前に、関連性理論の枠組みにおけるアイロニーの捉え方について簡単に紹介したいと思う。

## 1 関連性理論におけるアイロニー<sup>2</sup>

「表面的な意味とは反対の意味のことばを使用すること」と『現代英語学辞典』（成美堂）が定義するように、アイロニーは、言っていることと反対のことを表す修辞技法であると伝統的に考えられている。佐藤信夫（1996: 246-7）においても、以下に示すように、「意味の反転運動を発生させることば」と再定義することによって、単に本心の反対を語るものではないとしているものの、意味の反転が繰り返されるという面を強調しているだけで、反対の意味を問題にしている点において伝統的定義とそれ程異なるものではない。

(4) それとおなじように、反語もまた、「Xである」ということばが逆転して《反Xである》という意味になりきるわけではないだろう。あくまで《Xが反転したものとしての反X》なのであって、無垢の《反X》ではない。その残像効果こそ反語の本質であって、それがなければ誰もはじめから反語など語りはしない。率直に、あるいは露骨に表現したほうが、手間もはぶけて、だいいち誤解の恐れも少ないのだ。

Grice（1975）は、アイロニーについて、質の第一公理（maxim of truthfulness）に意図的に違反することによって、暗意として反対の意味を伝えるもの

であると現代語用論の観点からの再定義を試みたが、この Grice (1975) についても、基本的には古典的定義の域を出るものではない。これに対し、Wilson and Sperber (1992) は、アイロニーは必ずしも反対の意味を表すものではないとし、その反例を挙げることによって、Grice の接近法を含めた伝統的捉え方を完全に否定している。

前述の通り、アイロニーの特徴について、他に帰属する思考をエコーし、同時にそれを拒絶する態度を示すことであると関連性理論では考えている。エコーとは厳密に言うと、他者の思考をある表示を使って表し、同時にそれに対する態度を示すことを指す。例えば、「雨の降りしきるラッシュの混雑時」などの悪条件下のロンドンで、‘When a man is tired of London, he is tired of life’が発話されたとする。この発話では、ジョンソン博士のロンドンに対する考えもしくはジョンソン博士の言葉に代表されるようなロンドンに対する考えが拒絶の態度を伴ってエコーされている。この発話の場合も、反対の内容を伝達しているのではなく、この発話に象徴されるロンドンに対する気持ちを単にからかっているだけなのである。Sperber and Wilson は、この例の他にもアイロニーを含んだ控えめ表現や感嘆表現について、「言っていることと反対のことを表す」とする伝統的定義には当てはまらないアイロニーの例や伝統的定義の要件を満たしてはいるがアイロニーが欠如している例などを挙げ、伝統的定義の問題点を指摘している。

関連性理論の枠組みにおいてアイロニーを捉える際に、解釈的類似 (interpretive resemblance) という概念を無視することはできない。

(5) Where resemblance of propositional content is involved, we talk of *interpretive resemblance*; we reanalyse echoic utterances as echoic *interpretations* of an attributed thought or utterance, and verbal irony as a variety of echoic interpretation. Wilson and Sperber (1992: 65)

アイロニーでは、他に帰属する思考をエコーするが、そのエコーの対象（他に帰属する思考）とそれをエコーする発話との間に命題内容の類似、つまり解釈

的類似があると関連性理論では考えている。この類似は2つの命題内容がどのくらい論理的及び文脈の含意を共有するかによって決まる。上述のジョンソン博士の例では、字義的引用となっているため、アイロニーとエコーの対象となっている発話(思考)の命題が同一なものであり、字義的解釈となっているが、必ずしも2つの命題が字義的なものである必要はない。つまり類似には、字義通り(2つの命題が同一)なものから、かなり類似性の低いものまでである。さらに、エコーされる思考は発話の形式をとる必要はないし、特定の人による発話と考える必要もない。

以上アイロニーの特徴について簡単に述べたが、Sperber and Wilson は、パロディについてどのような立場をとっているのだろうか。‘in parody the echo is primarily of linguistic form; in irony, as we have seen, it is of content’ (Wilson and Sperber (1992: 63)) と述べているように、Sperber and Wilson は、パロディに存在する類似(パロディの対象とパロディ作品間の類似)は、言語形式の類似であって、命題内容の類似ではないと考えている。この点をパロディとアイロニーの相違点とし、次のようにまとめている。

(6) Onomatopoeia is based on resemblances in sound, verbal mimicry on resemblances in phonetic and phonological form, direct quotation and parody on resemblance in syntactic and lexical form, translation on resemblances in propositional content. Where resemblance of propositional content is involved, we talk of *interpretive resemblance*; we reanalyse echoic utterances as echoic *interpretations* of an attributed thought or utterance, and verbal irony as a variety of echoic interpretation.

Sperber and Wilson (1992: 65)

通常パロディでは、あるテキストを別の文脈で、文体や統語形式を模倣しつつも、差異を際立たせた形で再現する。したがって、明らかに原文を模倣しているということは認識できても、内容的には完全に異なるものとなり、命題内容の類似が見られない場合が多い。

(7) 犬伏老人は話し上手だが、ずいぶんいんちき臭いところがあり、僕もまた多少の誇大癖があるので、一字一句あてにならぬことばかりあると思われる。

井上ひさし『新釈遠野物語』

(8) 鏡石君は話上手にはあらざれども誠実なる人なり。自分もまた一字一句をも加減せず感じたままを書きたり。

柳田國男「遠野物語」

(7)は「遠野物語」のパロディである。遠野(近く)の人物に話を聞くという筋の設定と語彙及び統語形式における類似は確かにあるが、内容に関しては完全に異なるものとなっている。

(9) THERE are certain things—as, a spider, a

ghost,

The income-tax, gout, an umbrella for

three—

That I hate, but the thing that I hate the

most

Is a thing they call the Sea.

(Carroll, A Sea Dirge)

(10) It was many and many a year ago,

In a kingdom by the sea,

That a maiden there lived whom you may know

By the name of Annabel Lee...

(Poe, Annabel Lee)

(9)においては、語彙的及び統語的類似も多少は見受けられるが、‘a spider, a ghost’ と ‘a year ago’, ‘an umbrella for three’ と ‘Annabel Lee’ 等の対応にそれぞれ見られるように、主に音韻的な類似が強調されているだけで、やはり内容に関する類似点は無いと言っても過言ではない。パロディの一般的傾向に鑑みると、Sperber and Wilson が主張するように、パロディには命題内容の類似はなく、これがパロディとアイロニーとを分ける相違点であるとも言える。しがしながら、パロディには多様な形式があり、2つのテキスト間に命題内容

の類似関係が成立する場合もある。このパロディの多様性を通して、パロディとアイロニーとの類似と相違に迫りたいと思う。

## 2 パロディとアイロニーの類似

パロディでは、差異を強調する目的で、パロディ化の対象となっている発話(テキスト)の意味内容が大きく改変されるため、命題間に類似が見出されない場合が多い。確かに、差異を際立たせ不一致を生じさせることは、パロディの特徴として不可欠な要素ではあるが、命題内容を完全に変化させずとも発話(テキスト)間の不一致は生ずる。まず第一に、ある発話(テキスト)を異なるコンテキストにおいて再現することによって、対象とパロディとの間に不一致もしくはズレが生ずる可能性がでてくる。したがって極端な場合では、同一の命題内容を異なるコンテキストにおいて用いることによって、パロディとなることもある。

(11) Nixon: Asia does involve, I think, very appropriately as you have suggested, give-and-take.

Cronauer: Well, I really don't make that suggestion, sir, I'm sorry.

(11)は、*Good Morning Vietnam* という映画作品の中で、DJ の Cronauer が、Nixon が実際に行った発話を自分との対話形式となるように編集してパロディ化したものである。Cronauer によって勝手に引用されたものであり、Cronauer との間に行われた実際の会話ではないため、Nixon による Cronauer への発話ではない。これは、むしろ Cronauer から聞き手に対する伝達行為である。この例では、Nixon の発話が肉声のまま使用されているので、命題内容は完全に同一のものである。このパロディの効果を高めるために、(11)に続けて、話題を政治的内容から完全に無意味なくならない内容に変化させる。

(12) Cronauer: Mr. Nixon, thank you for that concise political commentary but I think I'd like to delve into something slightly more personal for the

men in the field. How would you describe your testicles?

Nixon: That they're soft, that they're shallow, that they have no purpose.

Cronauer: What are you saying, sir?

Nixon: That they lack the physical strength.

Cronauer: How would you describe your sex life with your wife Pat?

Nixon: Uh, it is unexciting sometimes.

Cronauer: Well, have you considered possibly a sex change? There is an operation that can transform you into a female Great Dane or possibly a very well-hung Chihuahua. Mr. Nixon, while you've been in Vietnam, it's rumoured that you smoked marijuana home, back to the United States? How would you do that?

Nixon: By plane, by helicopter and also by automobile.

(12)の例も Nixon の発話をそのまま使用しているが、'How would you describe your testicles?' などの Cronauer の質問を差し挟むことによって、'they' などの代名詞の指示対象も変化し、これに伴い命題内容も変化してしまっている。そのため(11)とは異なり命題内容が同一ではないが、それでも命題内容の類似性は残る。

(13)は、(14)をエコーするアイロニーの例として、Curc6 (1995:40) が挙げたものである。

(13) Our friends are always there when they need us.

(14) Our friends are always there when we need them.

Curc6 (1995:40) が指摘するように、次に示す分析的含意を共有することによって、(13)と(14)の間には、解釈的類似関係 (interpretive resemblance) が成立している。

(15) s1=Our friends are always somewhere in some circumstances.



s2=Our friends are always there in some circumstances.

s3=Our friends are always there when something is the case.

詳細は後述するが、(13)は(14)をエコーするアイロニーであるとともに、(14)を新たなコンテキストで再現したパロディでもある。アイロニーとパロディの対象は同一であり、それぞれ対象との間に解釈的類似関係が存在しており、パロディに命題内容の類似を認めない Sperber and Wilson の主張があまりに制限的であることを裏付ける一例となっている。さらに(13)では、従属節の主語と目的語を置き換えることによって、意味内容（命題内容）に差異が生じている点にも注意が必要である。文の一部を変更するという手法は、パロディにおいてよく用いられる手法であり、パロディの場合でも2つの命題間に類似関係が生ずる可能性があることをこの点は示唆している。例えば、(12)の例の場合も、類似性の度合いの問題はあるが、代名詞の指示対象が異なっているだけで、命題間に類似関係、つまり解釈的類似がないとは言えない。

アイロニーの場合と同様に、解釈的類似という概念を用いているので、2つの命題内容が同一でなくてはならないと考える必要はない。注目すべきは、程度の差こそあれ、2つの命題が含意を共有することによって、パロディにおいても解釈的類似関係が成立しているという事実なのである。

次の例も、パロディの対象と解釈的に類似する。

(16) Then suddenly, one awful day,  
She heard the Magic Mirror say,  
'From now on, Queen, you're *Number Two*.  
'*Snow-White* is prettier than you!  
The Queen went absolutely wild.

(Dahl: *Snow-White and the Seven Dwarfs*)

これは R. Dahl による白雪姫のパロディである。原作との差異は、よりくだけた口語表現を用いることによって示されているが、命題内容の類似という観点

から考えれば、原作の命題との間に解釈的類似関係があることは容易に判断できる。(17)の例は、Dickens による ‘A Christmas Carol’ を J. Garner がパロディ化したものである。ここでは、‘dead’ の代わりに PC (政治的に正しい) 表現に直した ‘non-viable’ が使われている。文字通りの解釈 (literal interpretation) ではないが、原文の命題と含意を共有し、解釈的に類似すると言える。

(17) Marley was non-viable, to begin with; there is no doubt whatever about that.... (Garner: A Christmas Carol)

(18) Marley was dead: to begin with. There is no doubt whatever about that. (Dickens: A Christmas Carol)

次の例は、「白雪姫」からのもので、女王が鏡に向かって、誰が一番美しいかを問う場面である。

(19) ‘Alas, if worth be based on beauty,  
Snow White has surpassed you, cutie.’ (Garner: Snow White)

(20) ‘Thou, queen, may’st fair and beauteous be,  
But Snow-drop is lovelier far than thee!’  
(Snow-Drop (Puffin Books))

(20’) ‘Frau Königin, Ihr seid die schönste hier,  
aber Sneewittchen ist tausendmal schöner als Ihr.’  
(J. and W. Grimm: Sneewittchen)

この例では、PC の考え方を意識して、「肉体的な美しさという価値基準による判断は正しいものではないが、その基準に限定して比較すると、白雪姫のほうが優れている」という含意が込められている。字義通りではないが、この命題内容も原文の命題内容と解釈的に類似していると言える。次に挙げる Garner 版の ‘Rumpelstiltskin’ では、貧しいという差別につながる表現を避け、婉曲的に「経済的に不利な立場におかれた (恵まれない)」という表現が使われてい

る。

(21) Long ago in a kingdom far away, there lived a miller who was very economically disadvantaged.

(Garner: Rumpelstiltskin)

(22) In a certain kingdom once lived a poor miller who had a very beautiful daughter.

(22') Es war einmal ein Müller, der war arm, aber er hatte eine schöne Tochter.  
(J. and W. Grimm: Rumpel-Stilts-Kin)

(21)に「美しい娘」に関する記述はないが、(21)と(22)の命題内容は、解釈的にかなり類似していると考えられる。

前述の通り、パロディでは原文の文体のみ模倣したり、内容を模倣する場合でもその内容を意図的に大幅に変更したりすることが多いため、解釈的類似関係が成立しないことが多い。Garner の例でも、原作の基本的な筋だけを追って、Grimm の原文を厳密にパロディ化してはいないので、パロディ作品全体としては、類似点の見出せない箇所の方が多い。しかし、上記の例で明らかのように、Sperber and Wilson の主張に反し、原文とパロディとが解釈的に類似することがあり、その他のパロディ作品においても、この可能性を排除することはできない。Sperber and Wilson がアイロニーにしかないと考えた解釈的類似がパロディにも生じる可能性があり、これがアイロニーとパロディの接点になるのである。

しかし、両者の機能上の特徴には相違がある。アイロニーは他に帰属する思考(言葉として表されていないものも含む)をエコーし、同時にそれを拒絶することを特徴としている。これに対してパロディは、対象となる作品や発話を異なるコンテキストの中に新たに再現するという機能を持ち、アイロニーと異なり拒絶の態度を必要とはしない。また、パロディでは、アイロニーのように解釈的類似関係が生ずるとは限らず、解釈的類似が成立した場合にパロディとアイロニーが接近するのである。パロディの対象を新たなコンテキストで再現

するという特徴と、思考をエコーするというアイロニーの特徴が類似していることから、アイロニーがパロディ内に生じたり、2つが密接に結びつき区別することが出来なくなってしまうという現象が起こるのである。

### 3 パロディとアイロニーの類似と相違

#### 3.1 パロディとアイロニーの対象が異なる場合

パロディにおいても対象との間に解釈的類似関係が成立する可能性があり、この類似関係が存在する場合に、これを通してパロディとアイロニーが接近すると述べたが、具体例を通して、両者の類似と相違について分析を試みたい。まずは、既出の Garner の例に新たに一例を追加し、パロディの対象とアイロニーのエコーの対象という面を中心に、再分析を試みることにする。

(23) Marley was non-viable, to begin with; there is no doubt whatever about that. . . . (Garner: A Christmas Carol)

(24) ‘Alas, if worth be based on beauty,  
Snow White has surpassed you, cutie.’ (Garner: Snow White)

(25) . . . their vertically challenged pre-adult came into the room.  
(Garner: A Christmas Carol)

(23)では、‘dead’ という表現を避け、(24)では、外見上の美に価値観を置く ‘far more beautiful’ という表現を避け、(25)においては、‘Tiny Tim’ と言う代わりに年齢と身体的特徴に関する差別表現を避け、それぞれ以上のような表現が使われている。これらの例では、すべて誇張を込めて政治的に正しい表現に書きかえられているのである。原文とパロディの間には、PC 派の立場からすれば差別用語と見做しうるような表現に対する取り扱いの違いが明らかにあるが、批判の対象となっているのは、原作者の Dickens や Grimm、もしくは彼らの原作自体ではなく、PC を主張する PC 派の人達となっている。これはアイロニーによる効果で Garner は PC 派の人達の典型的思考をエコーし、同時に

童話など子供を対象とする文学作品に、このような表現を使用することに対する愚かさ・不適切さを示すことによって、これを退けている。結果として、PC派の行き過ぎを面白おかしく批判することに成功している。つまり笑いの要素を残しながら、「過激な PC は危険である、馬鹿げている、物語を台無しにするものである」などの含意、つまり暗意を伝えているのである。これはパロディに組み込まれたアイロニーによって伝えられる意味なのである。関連性理論の観点から分析すれば、このようなパロディを理解する際、原文の内容を想起し、パロディで使われている婉曲表現と原文との表現との差から読者は高い効果を期待する。必然的にこのような文の解釈にはかなりの処理労力を伴うが、読者は、その労力を補って余りある効果を期待し、パロディの中に組み込まれているアイロニーをも読み取ろうとするのである。結果として、本文が伝える内容に加えて、諧謔・皮肉などを含めた様々な効果が得られるのである。

さらに、パロディとアイロニーの対象が異なる例を考察する。(26)にはアイロニーは含まれていないが、Canning and Frere による Inscription は、フランス革命に刺激された思想とその同情者を激しく攻撃した *The Anti-Jacobin* からのもので、ここでは Southey の政治的態度が非難されている。対照のために、原詩も併記する。<sup>3</sup>

(26) Dost thou ask her crime?

SHE WHIPP'D TWO FEMAL 'PRENTICES TO DEATH,  
AND HID THEM IN COAL-HOLE. (Canning and Frere: Inscription)

(27) Dost thou ask her crime?

He had rebell'd against the King, and sat  
In judgement on him.... (Southey: Inscription)

Henry Marten は王政復古後 30 年間幽閉された人物で、Southey は共和制を望む彼の思想に同情を示していたが、Canning and Frere のパロディでは、その Marten と奉公人を殺した残虐な Brownrigg とが対置されている。一般的にパロディでは作品間の相互作用が重要であり、類似性を認識すると原文の内

容を文脈に補うことが読者に要求される。細部に至るまでの情報が必要な場合もあるが、単に概略的内容を想起するだけで済む場合もある。これを決定するのが、関連性の原理であり、発話解釈に必要な情報とは労力の面から無視される。しかし、パロディ解釈には、全般的に労力がかかるのは事実なので、原文に対する知識が不十分であるか欠如している場合には内容を理解できないか、もしくはパロディを見落とす危険性がでてくる。(28)に関して H. Marten に関する知識、Southey の共和制に対する考え方などに関する情報を文脈に補う必要がある。これらの情報とパロディで扱われている内容（特に残酷な Brownrigg に関する情報）との差から様々な解釈、つまり認知効果が得られる。Marten の私生活での乱れと無関係ではないと思うが、Brownrigg をパロディで用いることにより「サウジーの同情も無意味なものでむしろ無政府主義に通ずるものである」などの含意も得ることができる。この点は、アイロニーを含むこの詩の最後の部分で強調される。

(28) Harsh Laws! But time shall come,  
When France shall reign, and Laws be all repealed! (Canning and Frere:  
Inscription)

(29) Blessed hopes! awhile  
From man withheld, even to the latter days,  
When CHRIST shall come and all things be fulfill'd. (Southey: Inscription)

‘But’以下の文はアイロニーとなっているが、パロディとは異なり Southey の原文自体ではなく、彼に代表される共和主義者達の考えがエコーの対象となっている。Southey を含め、共和主義者達を攻撃する文脈から考えると、これを拒絶する態度は明らかである。つまり、パロディとアイロニーにおけるエコーの対象が異なっており、アイロニーがパロディとは別のレベルで機能しているのである。このようにパロディの中でアイロニーを用いることも両者の区別を困難とする一因となっていると考えられる。

### 3.2 パロディとアイロニーの対象が同一の場合

パロディとアイロニーの対象が異なり、パロディ作品内でアイロニーが用いられる例を見てきたが、今度は両者が同一の対象に対して機能する場合について考察する。まずは、相手の発話を文字通りに再現したパロディの例から分析を試みたい。

(30) 'I know this town like the back of my hand' (said by wife to husband who's driving a car and is lost)      Rossen-Knill and Henry (1997: 736)

土地鑑に自信を持つ夫の言葉を、妻が繰り返して言ったものである。夫の言葉をそのまま繰り返しているので、パロディの対象とパロディは同一の命題を持ち、(30)は夫の発話の文字通りの解釈となっている。ここで注意すべきは、この妻による発話が夫の発話のパロディであると同時にアイロニーとなっているという点である。やはりこの原因も、解釈的類似にあるものと推察される。(30)は、夫の発話を車を運転していて迷ってしまったという別のコンテキストにおいて再現したものであり、この点に関する限り、この例はパロディである。ただし、夫の発話を字義通りに再現したものであり、対象とパロディの間には解釈的類似関係が存在し、視点を変えれば、夫の発話のエコーであるとも取れるのである。しかも、道に迷ってしまったというコンテキストにおいて発話されているので、アイロニーとしての必須条件である「他に帰属する思考を拒絶する」態度もある。つまり、(30)は、アイロニーの要件も満たしているのである。この例では、夫の発話の文字通りの解釈となっているが、文字通りでない場合でも、結果は同じである。例えば、夫の発話が仮に'I know every corner of this town'であったとしても、解釈的類似関係があることには変わりがないので、アイロニーは生ずる。パロディにとって、解釈的類似は不可欠な要素ではないが、上記の例のように、解釈的類似関係と拒絶的態度が存在する場合に限って、アイロニーが生ずるのである。この場合アイロニーがパロディの中に生じているとも取れるが、2つが同時発生しているとも考えられる。

Rossen-Knill and Henry も、アイロニーが生じているという点を認め、次のように述べている。

(31) Without the re-presenting act (with only one code (Rose, 1979: 51)) , *I know this town like the back of my hand* functions as irony. With re-presentation (which employs two codes (Rose, 1979: 51)) , the utterance functions as a parody. The parody may be called an *ironic* parody, owing to the irony produced by the first incongruity.

Rossen-Knill and Henry (1997: 737)

Rossen-Knill and Henry も Wilson and Sperber (1992) に言及してはいるものの、アイロニーの基本的考え方は、以下に示す Rose の考え方に準拠している。

(32) Irony alone, however, is usually more 'cryptic' than most parody, which—though ambiguously containing a mixture of messages—usually also contains at least two distinct codes with two distinct sets of messages from more than the one author, in contrast to the combination of messages in the single code of the ironist.

Rose (1993: 88)

つまり、パロディには、パロディの対象とそれを新たな形でパロディとして再現した2つのコードがあるが、アイロニーでは、コードは1つで、文字通りの意味 (apparent message) の中に、それとは反対の意味 (real message) が隠されているというものである。上記の例においては、妻の発話行為の文字通りの意味と含意との差からアイロニーが生まれるとしている。

(33) There is the disparity between the literal and implicated meaning of the wife's speech act, the first corresponding to 'you have a great sense of direction'; the second to 'you're lost'.



この考え方は、基本的には、アイロニーの伝統的定義の域を出るものではなく、関連性の枠組みにおけるアイロニー分析とは完全に異なる。関連性理論では、すでに何度も強調したように、他者に帰属する思考を拒絶の態度を持ってエコーするものであると定義している。思考をエコーするという特徴は、パロディの対象を想起させるという特徴に類似しており、Rose や Rossen-Knill and Henry の言う意味での ‘single code’ には、当てはまらない。Rose や Rossen-Knill and Henry のアイロニーに関する主張は、文字通りの意味と反対の意味を表すとする古典的定義に類似したものであり、アイロニーの特徴を正確に捉えているとは言えない。しかし、アイロニーの特徴を見誤っているというものの、アイロニーが生じているということを指摘している点は、注目すべきである。これは、解釈的類似と拒絶の態度によるものなのである。

次に、(13)と(14)を以下に採録し、再びここで取り上げたいと思う。

(34) Our friends are always there when they need us.

(35) Our friends are always there when we need them.

(34)について、‘the speaker endorses the truth of her utterance and nonetheless ironic’ と Curcó (1995:40) が述べるように、この例は、発話の表出命題を真としながらも、アイロニーとなっている。アイロニーの場合、話者の使用した発話の命題内容自体が他者に帰属する思考をエコーしたものであり、拒絶の態度もそれに対して示されることが多いが、この例においては、(35)がエコーの対象となっており、これに対して拒絶の態度が示されている。(35)は有名な諺であり、(34)を聞いた瞬間に、聞き手は相手が(35)をエコーしていることを察するであろう。前述の通り、これら2つの命題は含意を共有し、解釈的に類似している。(34)と解釈的に類似した(35)をエコーし、同時に拒絶の態度を示すことによってアイロニーが生じているのである。この例がアイロニーとなっているのは事実であるが、視点を変えれば、(34)は(35)を（諺とは対照的に、友人たちが困った時になると現れるという）異なるコンテキストにおいて再現したパロディであるとも考えられる。諺などの有名な言葉をその一部を意図的に変えることに

よって滑稽な効果等を生じさせるというのは、パロディの常套手段である。有名な諺などの場合、一部を変更させたパロディを聞けば、パロディの対象が何であるかの判断はたやすくできる。上記2例が解釈的に類似していることから、諺を拒絶の態度を持ってエコーしたアイロニーであるとも、諺を新しいコンテキストにおいて再現したパロディであるとも取れるのである。このように、発話の命題が他の命題と解釈的に類似している場合、そこに拒絶の態度の表明という条件が加われば、パロディとアイロニーが共に成立する可能性が生ずるのである。

次の例はシンデレラのパロディであるが、この中に用いられているアイロニーも、発話の命題自体を真としつつも、この命題によって喚起される別の命題に対して拒絶の態度を示しているものと考えられる。分析の前に、以下の例に至るまでの経緯を簡単に説明する。グリムの作品、あるいは一般に知られた童話の内容とは異なり、Dahl の作品では、王子はシンデレラの姉に強く言い寄られる。王子は青ざめ、絶体絶命の状態となる。ここで読者は、姉との結婚を強いられるなど、次の話の展開について童話とは異なる何らかの予想を立てるのであろう。この予想を裏切る形で、王子は姉の首を刎ねるという行動に出て、この意外な展開に読者は驚かされる。このように、差異を示しつつ原文を新たな形で再現することによって、パロディが成立しているのである。<sup>4</sup> (36)は、このDahl のパロディ作品の最後の場面で、シンデレラは異常な行動をとる王子に対して嫌気が差し、次のように妖精に返答する。

(36) Cindy answered, 'Oh kind Fairy,  
'This time I shall be more wary.  
'No more Princes, no more money.  
'I have had my taste of honey.  
'I'm wishing for a decent man.  
'They're hard to find. D'you think you can?'  
Within a minute, Cinderella  
Was married to a lovely feller,

Who sold good home-made marmalade.  
 Their house was filled with smiles and laughter  
 And they were happy ever after.

(Dahl: Snow-White and the Seven Dwarfs)

王子と結婚し幸せな生活を送るというおとぎ話に見られる典型的な結末に対して、シンデレラは真面目で平凡な男との結婚を望む。その結果、「その後一生幸せに暮らした」というアイロニーでこの話は締めくくられる。それではこのアイロニーは如何なる形で機能しているのであろうか。Curc6の例に類似して、最後の行の命題は真であると考えられる。したがって、拒絶の態度が示されているのは、この表出命題に対してではない。エコーの対象になっているのは、この文によって喚起される童話のシンデレラ、もしくはおとぎ話一般の結末に使われる表現（文）の命題であると考えられる。アイロニーのみならず、パロディもシンデレラ及びおとぎ話一般の結末に使用される表現を再現している。通常物語であれば、王子との出会いによって幸せが約束されるのであるが、Dahlの作品の中では、この考え方が否定されている。つまり、エコーの対象となっている、「王子との結婚によって、その後一生幸せに暮らす」という考えが、この物語の中では、完全に拒絶されているのである。パロディにおいてもこの考えと「まじめな男との極当たり前の結婚によって、その後一生幸せに暮らす」という考えが対比されている。以上のように、アイロニーとパロディの対象は同一であり、この対象に対して、アイロニーとパロディが共起しているとも、両者が融合しているとも言え、2つが密接に結びついてしまっているのである。

最後にパロディとアイロニーとの類似と相違に関してまとめたい。解釈的類似がある場合に両者が接近すると述べたが、厳密に言うと、ある発話において、パロディの対象とアイロニーのエコーの対象が同一であり、そこに解釈的類似関係が成立する場合、アイロニーとパロディの双方が同一の対象に対して生ずることになり、区別が付かなくなる程接近する。これに対して、3.1で見てきたように、パロディの対象とアイロニーの対象が異なる場合、同一発話内に共起

していても、両者は別のレベルで生じていることになる。Garnerの作品を通して説明を試みたように、たとえ対象との間に解釈的類似関係があったとしても、アイロニーはこの類似関係を利用してはならず、別の思考をエコーしていることになるのである。パロディに生ずるアイロニーは、パロディの対象以外に様々な思考をエコーすることができるため、パロディの対象との間に命題間の類似が見出せないようなパロディにおいても、アイロニーは当然成立するのである。この場合は、パロディの中に他の文彩表現が使われるのと同様、アイロニーは原文以外の思考をエコーすることになり、パロディとは別のレベルで働き、パロディの中でアイロニーが使用されたに過ぎないということになる。

## まとめ

パロディとは暗示引用の一種で、対象を新しいコンテキストにおいて意図的に再現し、同時にその意図を相手に伝達することを特徴としており、再現の際に、対象とパロディとの間に、何らかの不一致が生ずる。この不一致から、滑稽さや皮肉等の様々な相手の認知環境を改変するような効果が生まれる。また、パロディでは、しばしば原作者の文体や大まかな筋のみ模倣し、内容的には完全に新しい作品として創作されるので、Sperber and Wilsonの主張するように、対象とパロディとの間に命題内容の類似が見られない場合が多い。しかし本稿では、パロディには、統語・語彙形式の類似だけでなく、解釈的類似が生ずることがあるという点を強調した。これに対して、アイロニーの特徴は、他に帰属する思考を拒絶しながらエコーすることである。アイロニーでは、エコーの対象との間に解釈的類似関係が成立するが、これがパロディとの接点となる。パロディでは、類似関係は必要条件ではないが、対象との間に解釈的類似関係がある場合、そこに拒絶的態度という条件が加われば、アイロニーと結びつく可能性がでてくる。パロディの対象とアイロニーのエコーの対象が同一であれば、パロディ内にアイロニーが生じたとも、両者が共起したとも解釈でき、いずれであるかの区別は困難となる。たしかに、アイロニーはパロディと結びつくことがあるが、エコーの対象とパロディの対象が一致するとは限らないという点も指摘した。この場合、パロディとアイロニーが同一発話内で共起

していても、両者は別のレベルで生じていることになる。

アイロニーの解釈においては、相手が如何なる思考を如何なる態度をもってエコーしているかを受信者は判断しなくてはならない。これらの作業は、関連性の原理に基づいて行われ、高い効果を低い労力で得られる最適な関連性を有する解釈を得ようとする。パロディの解釈では、パロディの対象が何であるかを判断し、その対象に関する情報を文脈に補うことが受信者に要求される。細部に至るまでの情報が必要な場合もあるが、単に概略の内容を想起するだけで済む場合もあり、これを決定するのも、関連性の原理である。パロディとアイロニーを含む文彩に関わる発話解釈は、すべて関連性の原理に基づいて行われるものであり、発話解釈の特別な事例として他の発話と区別して扱う必要はないという点を最後に強調したい。

## 注

\* 本稿は日本英文学会第 73 回大会（2001 年 5 月 20 日、於学習院大学）における口頭発表の内容に加筆・修正を施したものである。口頭発表においては、パロディを中心に関連性理論の観点から考察したが、本稿においては、パロディとアイロニーの双方に注目し、両者間の類似と相違に焦点を絞って論じている。

1) Rose は、X であろうという期待を呼び起こしておいて、突然それを Y（無）に変えるという（‘Das Lachen ist ein Affekt aus der plötzlichen Verwandlung einer gespannten Erwartung in nichts’ (Kant 1963: 190)）Kant の考えを基にして、この不一致から生ずる効果を滑稽な効果に限定する。Rose 自身も認めているように、パロディでは、読者の関心の方向は、パロディの対象となっているテキストからパロディストのテキストへと向かうだけでなく、その逆にも向かう場合があり、関心の方向性は、両方向考えられるため、必ずしも Kant の述べるような形で諧謔が生ずるとは限らない。本稿では、滑稽さに加え、コンテクスト次第では、批判、皮肉など様々な効果を生み出すものと考えている。

2) 関連性理論の詳細については、Sperber and Wilson (1995) を参照。

- 3) 参考のため Southey による 'Inscription' と Canning and Frere によるパロディ版 'Inscription' の双方を、省略せずに以下に記す。

INSCRIPTION (Canning and Frere)

For one long term, or e'er her trial came,  
Here BROWNRIGG linger'd. Often have these cells  
Echoed her blasphemies, as with shrill voice  
She scream'd for fresh Geneva. Not to her  
Did the blithe fields of Tothill, or thy street,  
St. Giles, its fir varieties expand;  
Till at the last, in slow-drawn car, she went  
(19) To execution. Dost thou ask her crime?  
SHE WHIPP'D TWO FEMAL 'PRENTICES TO DEATH,  
AND HID THEM IN COAL-HOLE. For her mind  
Shaped strictest plans of discipline. Sage schemes!  
Such as Lycurgus taught, when at the shrine  
Of the Orthyian goddess he bade flog  
The little Spartans! such as erst chastised  
Our Milton, when at college. For this act  
Did Brownrigg swing. Harsh laws! But time shall com,  
When France shall reign, and laws be all repeal'd!

INSCRIPTION (Southey)

For thirty years secluded form man kind  
Here MARTEN linger'd. Often have these walls  
Echoed his footsteps, as with even tread  
He paced around his prison; not to him  
Did nature's fair varieties exist;  
He never saw the sun's delightful beams

Save when through you high bars he pour'd a sad  
And broken splendour. Dost thou ask hi crime?  
He had REBELL'D AGAINST THE KING, AND SAT  
IN JUDGEMENT ON HIM; for his ardent mind  
Shaped goodliest plans of happiness on earth,  
And peace and liberty. Wild dreams! but such  
As Plato loved; such as with holy zeal  
Our Milton wordhipp'd. Blessed hopes! a while  
From man withheld, even to the latter days  
When Christ shall come, and all things be fulfill'd!

- 4) パロディによる効果のすべてが、古い想定削除のみによって生ずるものではないことを追記する。パロディ作品に慣れた読者が、話の展開を予想し、それを確認する、つまり想定強化によって認知効果が生ずる場合もあると考えられる。したがって、この場合も、ある程度このパロディにあるような展開を読者が予想し、その想定が強化されることによって関連性が達成される可能性も考えられる。

## 参考文献

- Blakemore, D. *Understanding utterance: An Introduction to Pragmatics*. Oxford: Blackwell, 1992.
- Carston. R. 'Enrichment and loosening: complementary processes in deriving the proposition expressed?'. *UCL Working Papers in Linguistics* 8 (1996) : 205-32
- Carston. R. and Uchida. S. (eds) *Relevance Theory: Applications and Implications*. Amsterdam; John Benjamins, 1998.
- Curc6. C. 'Some observations on the pragmatics of humorous interpretations: a relevance theoretic approach'. *UCL Working Papers in Linguistics* 7 (1995) : 27-47.

- Dahl. R. *Revolting Rhymes*. New York: Puffin Books, 1995.
- Garner. J. *Politically Correct Bedtime Stories*. New York: Macmillan, 1994.
- Garner. J. *Once upon a More Enlightened Time*. New York: Macmillan, 1995.
- Garner. J. *Politically Correct Holiday Stories*. New York: Macmillan, 1995.
- Grice. P. 'Logic and conversation'. In S. Davis. (ed.) *Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press, 1991. 305-315.
- Grimm. J. and W. Grimm. *Grimms' Fairy Tales*. Harmondsworth: Puffin Books, 1994.
- Grimm. J. and W. Grimm. *Kinder- und Hausmärchen*. Stuttgart: Philipp Reclam Jun, 1984
- Hutcheon. L. *A Theory of parody*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2000.
- Kant. I. *Kritik der Urteilskraft*. Hamburg: Verlag von Felix Meiner, 1963
- Kant. I. *The Critique of Judgment*. Trans. J. Bernard. New York: Prometheus Books, 2000.
- Kent. D. and D. Ewen. (eds) *Romantic Parodies, 1797-1831*. Cranbury: Associated University Press, 1992.
- Rose. M. *Parody: ancient, modern, and post-modern*. Cambridge: Cambridge University Press, 1993.
- Rossen-knill, D. and R. Henry. 'The pragmatics of verbal parody.' *Journal of Pragmatics* 27 (1997) : 719-752.
- Sperber, D. and D. Wilson. 'Irony and the use-mention distinction'. In S. Davis. (ed.) *Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press, 1991. 550-563.
- Sperber, D. and D. Wilson. *Relevance: communication and cognition*. Oxford: Blackwell, 1995.
- Wilson, D. and D. Sperber. 'On verbal irony'. *Lingua* 87 (1992) : 53-76.
- Wilson, D. and D. Sperber. 'Representation and relevance'. In R. Kempson (ed.) *Mental representations*. Cambridge: Cambridge University Press,



1990. 133-153.

井上ひさし『新釈遠野物語』新潮文庫、1981

加島祥造編『ポー詩集』岩波文庫、1997

佐藤信夫『レトリック認識』講談社学術文庫、1996

高橋康成、沢崎順之助訳『ルイス・キャロル詩集』、1997

ドナルドソン、ローズ『パロディの仕組み』島岡将訳 鳳書房、1989

柳田國男『柳田國男全集 4』ちくま文庫、1989

# Similarities and differences between parody and irony

Okada Toshihiro

In parody the communicator intentionally re-presents its object in a new context, and this re-presenting act creates a gap or incongruity between the parody and its object. This incongruity produces various effects which modify the recipient's cognitive environment. Wilson and Sperber claim that parody is based on resemblances in syntactic and lexical form and does not involve resemblances of propositional content — unlike irony, which is invariably based on *interpretive resemblance*. In irony the communicator echoes a thought attributed to someone else while dissociating him or herself from it. Interpretive resemblance, however, can be involved in parody and it leads to a similarity rather than a difference between the two. When both interpretive resemblance and an attitude of dissociation occur in parody, irony can appear. It is possible for irony to co-occur with parody if the parodied object and the thought being echoed in irony are the same. In this case parody and irony are intricately intertwined with each other and cannot be separated. If the object of parody is different from the thought being echoed, on the other hand, both parody and irony occur in the same text, but they contribute to it separately. While there are many linguistic and literary theories on parody and irony, they fail to distinguish instances where parody and irony are intricately intertwined in the same text from those where parody and irony occur separately. It is assumed that the notion of interpretive resemblance and the expression of a dissociative attitude hold the key to the solution.